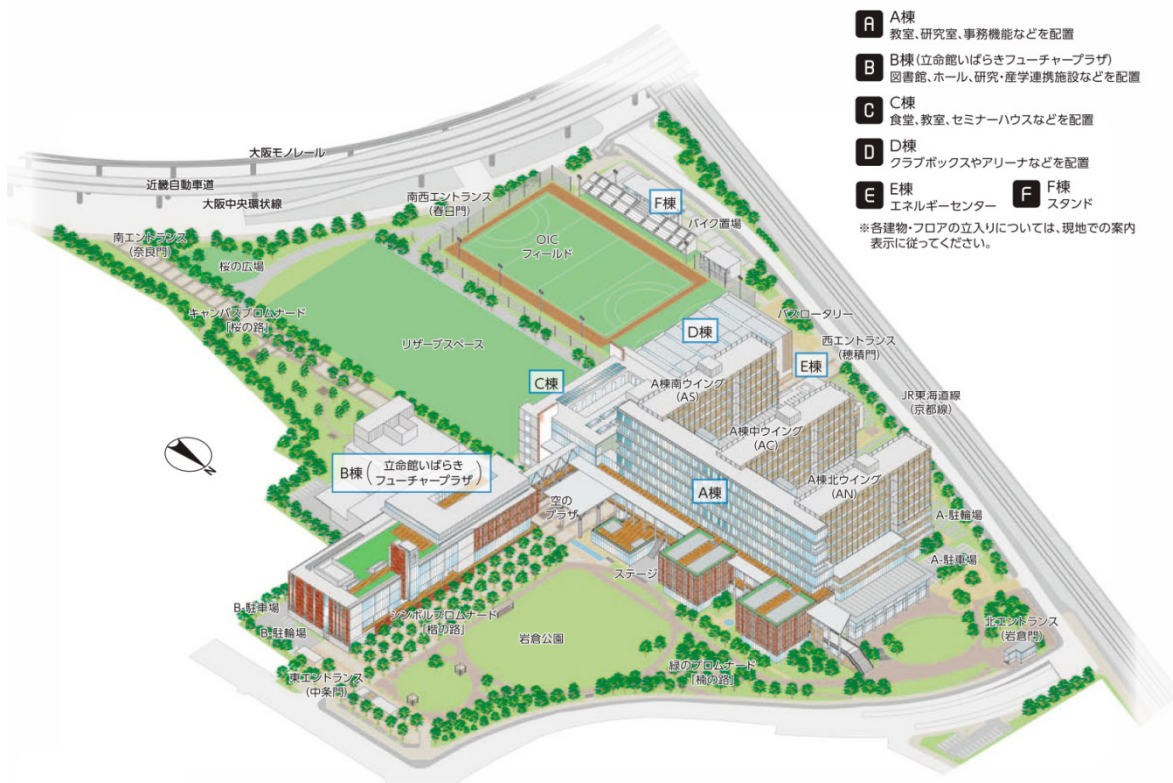
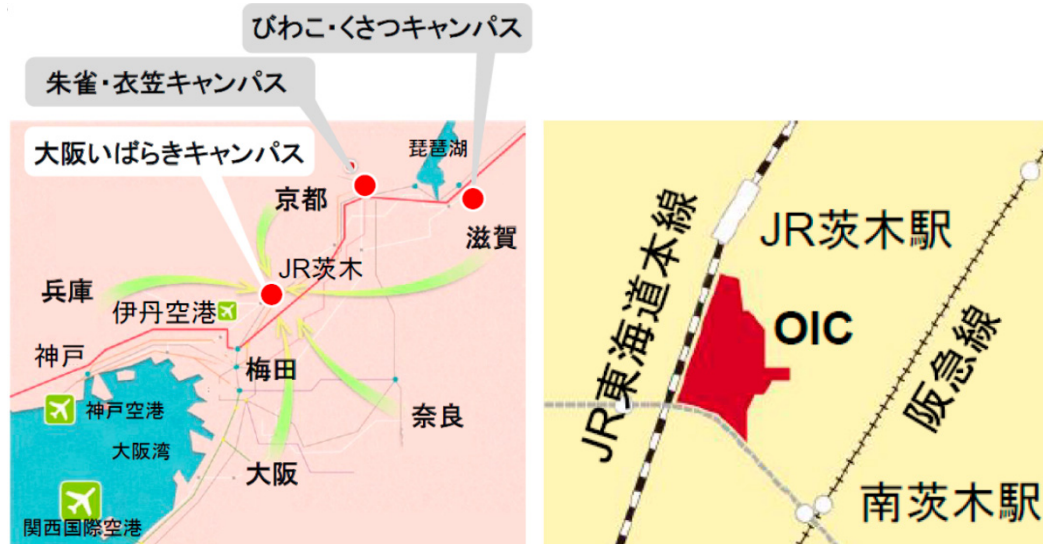


立命館大学

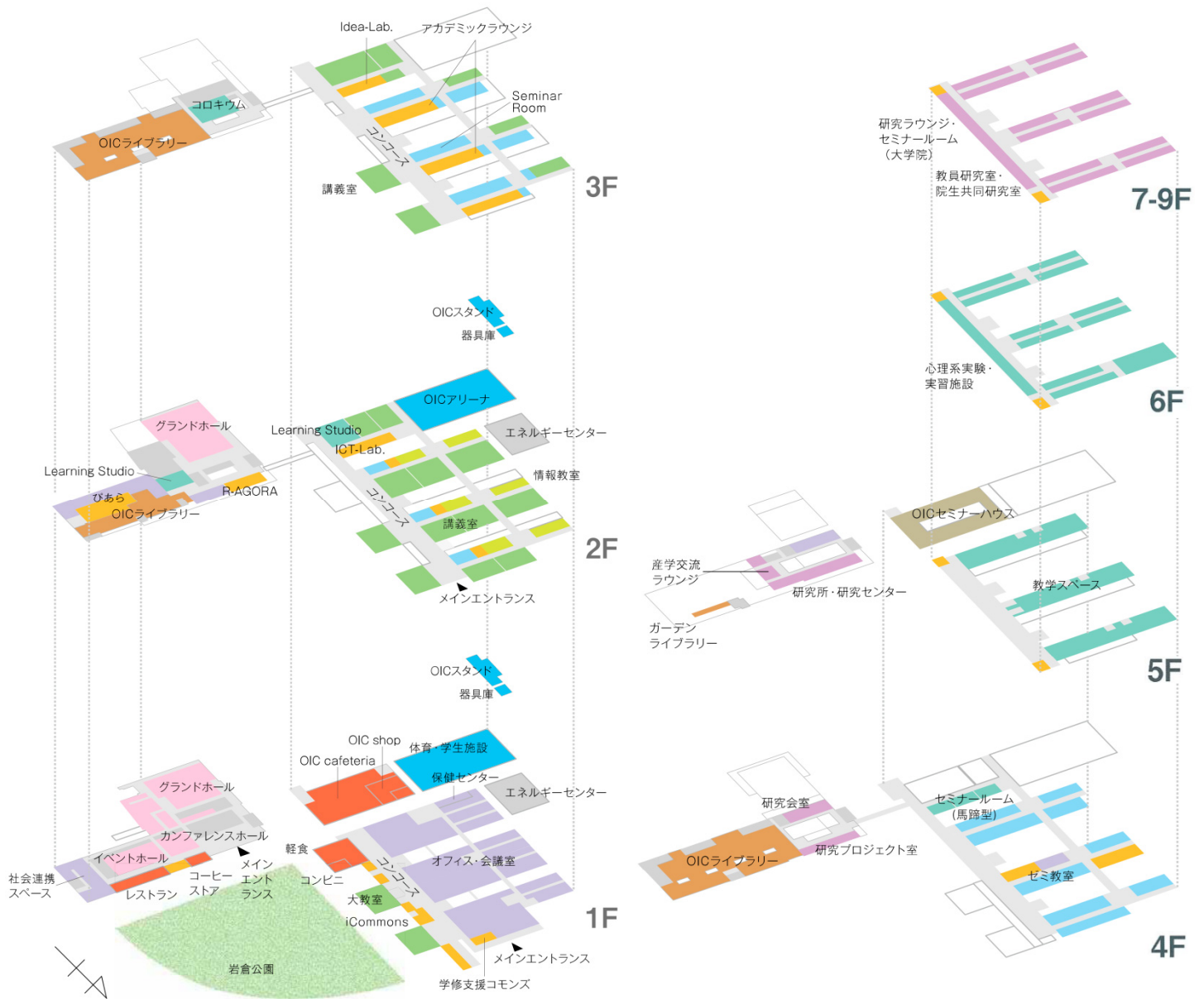
配置図



キャンパスの立地



平面図



- オフィス・会議室など
- 飲食・物販施設
- 体育・学生施設
- 図書館
- ホール・付帯施設
- 共有空間（コモンズ）
- 大・中教室
- ゼミ教室
- 情報教室
- その他教学施設
- 研究施設
- セミナーハウス
- 廊下・階段・吹抜など
- その他（テラス、デスク、屋上など）

整備概要

施設名称	立命館大学 大いばらきキャンパス
利用対象	<ul style="list-style-type: none"> ・学部：経営学部（びわこ・くさつキャンパスより移転） 政策科学部（衣笠キャンパスより移転） （総合心理学部：2016年4月設置予定） ・研究科：経営学研究科 政策科学研究科 テクノロジー・マネジメント研究科（MOT） 経営管理研究科（MBA） ・キャンパス内に商工会議所、図書館、ホール等の市民開放施設を設置 学生数約6,000名
設置年度（工期）	2015年4月開設（2013年7月～2015年2月）
整備手法	新築 構造 鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造
階数	A棟：地上9階、B棟：地上5階、C棟：地上5階、D棟：地上2階
のべ床面積	110,202.46㎡ （学舎棟84,369.62㎡、市街地整備施設24,136.4㎡）
設計・施工	設計監修：立命館キャンパス計画室 基本設計・設計監理統括：(株)山下設計 設計施工：(株)竹中工務店

整備内容

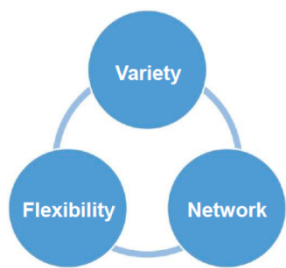
・整備のポイント

キャンパス全体をラーニング・プレイスに

～いつでも、どこでも、誰とでも、学び、学び合える～

キャンパス内に、コモンスやアクティブラーニングとよばれる学生の主体的な学びの場を各所にちりばめ、ネットワークを形成し、「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」となっている。また、空間・照明・サイン・家具において学生が更新可能な「オープンエンド（半づくり）」とよぶデザインにより、自己を取り巻く様々な変化に気づき、乗り越え、未来を生み出す学生を、大阪いばらきキャンパスが育てていくことを期待している。

学修環境「コモンス」「教室」の3つのコンセプト



1. Variety

「学び」を選ぶ、「学びたい」が広がる

2. Flexibility

カタチを変える、「学び」がうまれる

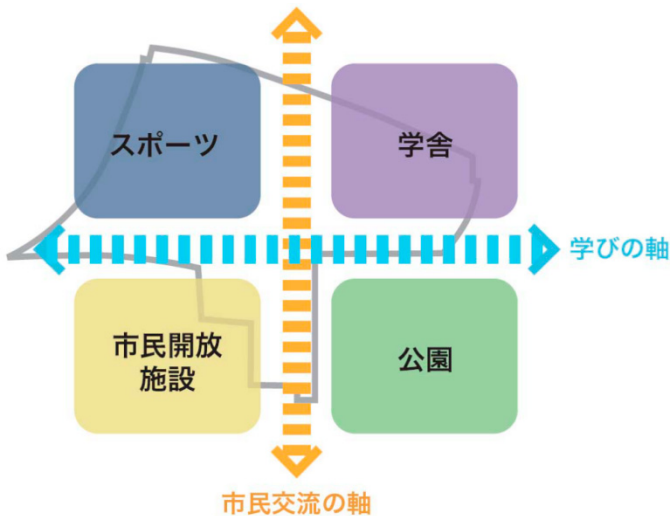
3. Network

ネットにつなぐ、「学び」がつながる

配置計画

塀のない街に開かれたキャンパスの実現にあたっては、敷地まわりの茨木市の道路と隣接する茨木市の岩倉公園（防災公園）と一体的なデザインの調整を図ることで、隣地境界がほとんどわからないレベルまでデザインの融合を図った。

地域の条里制を参照し、南北に「学びの軸」を設け、学生活動を支える機能を配置。東西に「市民交流の軸」を設け、市民に開放された機能を配置。



平面計画

・主動線でもありコモンスともなるコンコース

南北の軸は、内部空間では「コンコース」という各棟を連結する主動線であり、「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」を象徴する長さ 200m、幅 18m のコモンスとなっている。

学生が行き交う廊下としてだけでなく、学生の学修・活動・交流・情報発信・憩いといった様々なアクティビティが可能なオープンスペースとして活用できるよう、机や椅子、ちょうど腰掛けられる高さで張り出している階段の踊り場、掲示板や情報モニタ、PC、複合機等、「木陰」のように溜まりとなる空間を分散して配置。

・多様な教室やコモンスをキャンパス内の各所に配置

従来のスクール形式の教室のほか、グループワークやディスカッション、ワークショップなど、学生の多様なアクティブな学びに対応した教室も設置。この教室は、可動式の椅子や机、ホワイトボード、AV 機器などを設置し、利用者が学びのスタイル

に合わせて自由に配置できる。

コンコースと岩倉公園に面したガラス張りの多目的に利用できるコモンス（Room）、図書館内のラーニング・コモンス（びあら）、ICT の活用に特化した ICT-Lab.、学部教学に重点を置いたアカデミック・ラウンジ、アントレプレナー育成に特化した Idea-Lab. など、キャンパス各所に目的を持った学びの共有空間（コモンス）を豊富に設置。

什器整備の特徴

全館無線 LAN 対応、コモンスの随所に共用 PC、ノート PC の貸し出しロッカー、持ち込み PC からも印刷できる複合機、情報モニタなど、キャンパスのあらゆる場所が学びの場となるよう ICT 環境を整備。

また、キャンパス内のいろんな場所に「ピアボックス」という 1 面がホワイトボードのキューブを 250 個配置。椅子、机、物置、棚、台であり、アイデアを書き留める、イベントの告知、掲示板など多機能な利用が可能な家具である。

サインにおいては、カルタで遊ぶように 5×5 の 25 枚の札を自由に動かすことで、コモンスのサインを学生・教職員と一緒にデザインする「カルタサイン」システムを考案。利用者の手によって更新・成長する仕組みである。

その他の特徴（省 CO₂）

- ・大教室内に設けた人感センサーにより、学生数に応じた照明や空調の利用エリアを自動調整する「MOTTAINAI システム」
- ・季節、方位、利用人数に応じて、空調負荷のより低い部屋を優先して割り当てることで省エネにつなげる「スマート講義システム」
- ・屋外の快適性（天気、温度、湿度等）を数値化し、室内に表示することで在館者に屋外での活動「ネットワーク」を促す取り組み
- ・環境行動（エコアクション）に応じて、全国普及している WAON カードにポイントを付与する「エコアクションキャンパス」

その他の特徴（防災）

茨木市、隣接するイオンモール茨木（イオンリテール株式会社）と、地域の防災に関する啓発・研修、災害発生時における応急対応及び復興の各段階において、それぞれの持つ資源を活用しつつ相互連携協力を行うことを目的に「災害に強いまちづくり協定」を締結。

・運営・管理

学びステーション

1 階コンコースの西側には、学生オフィス、キャリアセンター、各学部の事務室等が集約配置されている。その一角に位置する「学びステーション」では、学生からの相談や質問に対して、部門を超えた連携によるワンストップサービスを提供している。

計画・設計プロセス

・整備の背景

教育研究の質向上、社会の要請としての国際化、地域連携など課題を受け、学園ビジョン「R2020」実現のため、アクセスのしやすい立地で、従来の概念を超えた新しいキャンパスづくりを求めた。

学園ビジョン「R2020」

人類と地球の、持続可能で平和な未来をつくるために、私たちは、私たち自身の、組織の、地域や国の、精度の、さまざまな“Border”を超えて、その力を発揮し、未来に貢献するスピリットあふれる学園になることを目指す。

学園ビジョンの3つの柱

1. 多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開
2. 人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦
3. 学ぶことの喜びを実感できる学園づくり

R2020

Creating a Future Beyond Borders

自分を超える、未来をつくる。

キャンパスの立地

地域・社会に開かれ、アジアと世界をつなぐキャンパスとして、京都と大阪の間でどちらにも交通の便がよい茨木のビール工場跡地（約12ha）。JR 茨木駅から徒歩5分の立地。

・整備の目的

都市型の立地を活かして、産業界や行政機関等との一層の連携による教学展開とともに、立命館学園の社会連携のフロントライン、交流拠点としての機能を整備し、学生の更なる成長を支援するキャンパスを目指した。

大阪いばらきキャンパスのコンセプト

教学コンセプト

- アジアのゲートウェイ**：課題先進国の経験と知の蓄積を活かし、アジアから世界へ、世界からアジアへ人と人、知と知をつなぐ「ゲートウェイ」としての役割を發揮する
- 都市共創**：都市に集積する多様な人材や組織をつなぎ、都市の中に点在するポテンシャルを最大限に引き出すことによって、新たな価値の創造を目指す
- 地域・社会連携**：地域・社会との連携を通じて教育・研究・学生活動のフィールドを拡げ、多様な活動を通じて相互の信頼関係を育み、豊かな地域・社会づくりに貢献する

大学のあり方を変える = 学びの立命館モデルの実現

キャンパスコンセプト

Open 地域・社会に開かれた丸見えオープンキャンパス

Innovative イノベーティブな学びを誘う盛りだくさんの仕掛け

Curiosity 好奇心いっぱいキャンパス

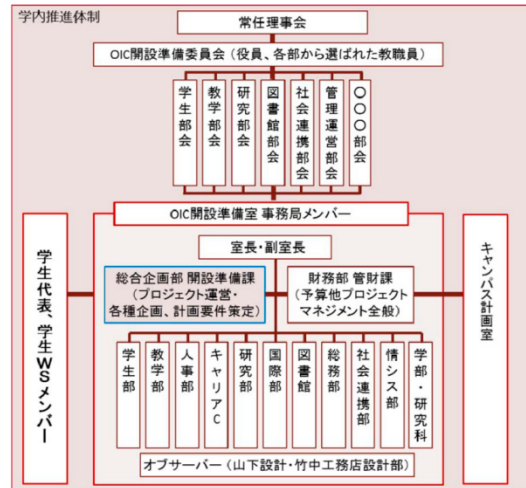
コンセプトの展開

- 万が一の地域の安心安全 水路活用の連携プレイ
- どこでもラーニングプレイス キャンパス全体が学び場
- アクティブな学びのスタイルを支援 自律的行動サポート 地域に開かれた学び場 公園一体キャンパス
- 情報シャワー ラーニングシアター 全周スクリーンの学び場
- 地域と共に学ぶ プロジェクトづくり だれでもウェルカム キャンパス 里山・ガーデニング・まちライブラリー 次代のダイバシティ対応
- ソトワーク テラスで学ぶ楽しい仕掛け 公園から丸見えコンコースと教室
- モットイナイシステム 環境にも優しい学び場

・計画・設計の推進体制

教員や学生によるボトムアップ型の検討が進められた。学部ごとのコモンズ（アカデミック・ラウンジ：BA-House、PS-Lounge 等）の計画は、学生が方針を立て、運用も含めた空間作りを主体的に行った。また、学外や階段などいたるところで学ぶ学生の動線や行動を観察した結果も整備に活かされている。

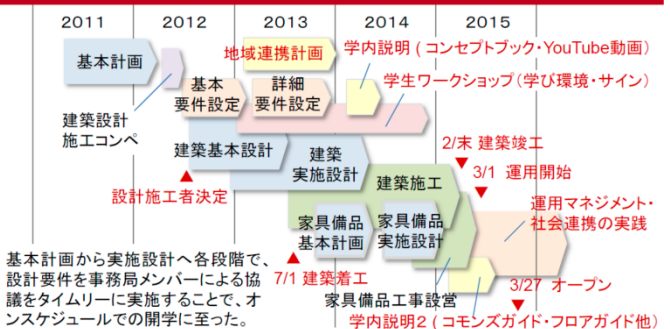
計画コアメンバーが開学後の運営、地域連携の推進も担当。前例のない学修スペースの検討を契機に部門を超えた協力体制が強まったことで、開学後、学生からの相談や質問に対してスムーズな連携が可能となり、ワンストップサービスの提供につながっている。



・構想から工事までのプロセス

	構想	計画・設計	工事
5年前	2010年11月 新キャンパス用地購入		
4年前	2011年 基本計画開始 11月 茨木市との基本協定		
3年前	2012年 基本計画完了 基本要件設定	建築設計施工コンペ 設計施工業者決定 建築基本設計開始	
2年前	2013年 地域連携計画 詳細要件設定	建築実施設計開始 学生ワークショップ開始 建築基本設計完了 家具備品基本計画	7月1日 建築着工
1年前	2014年学内説明① (コンセプトブック、YouTube 動画)	建築実施設計完了 学生ワークショップ完了 家具備品実施設計完了	建築施工 家具備品工事設営
完成	2015年学内説明② (コモンズガイド、フロアガイド他)		2月末 建築竣工 3月 移転作業

プロセス



基本計画から実施設計へ各段階で、設計要件を事務局メンバーによる協議をタイムリーに実施することで、オンスケジュールでの開学に至った。

整備後の評価と今後の展望

・利用状況

学生の使い方としては、昼食時に Room でランチミーティングをして、夕方は図書館で静かに勉強するなど、多様な環境の中からうまく使っている様子である。教員の意識も変わってきていると感じており、大変意欲的な活用もみられる。

キャンパス全体でみると、学会発表、映画上映、ラーニングシアターでのガーデニング講座、コンコースや Room でのイベントなど、把握しきれないほどの活動が生まれている。

・整備後の課題

市民活動と学生の活動、どちらも活発であり、そのために学生の活動が市民活動によって制約を受けないよう、対応している。

・今後の展望

様々な活動が生まれているが、その内容や目的、効果の把握が課題。

効果測定については学生や教員からの任意のデータ提供はあるが、効果を何で測定していくべきか、他大学とも連携しながら検討を進めているところである。学生の活動の中には、見ただけでは何を目的に空間を利用しているのかわからないものもあり、ヒアリング等をして学習観を探ることも検討している。既存キャンパスでの学びを知る教員・学生とキャンパス移転後の新入生との反応の違いの比較や、新入生がゼミに入るくらいまで観察して初めて測ることができる効果もあると考えている。

アクティブラーニングの空間は常に未完成であり、トレンドを吸収しながら変化し続けるものと考えている。地の利もあり、有志が集まってゆるやかなネットワークができ始めており、これを広めていきたい。